

論文要約

本稿は中国の近代(明清)の白話小説の代表作である《醒世姻縁傳》を中心として近世漢語の北方官話の白話小説の親族呼称語の語義、使用方式及び親族呼称語の言語変種の分類を検討したい。そして、系統的に明清時代の中国の北方官話の親族呼称語の状況を呈している。

本稿のテーマについて、本稿の親族呼称語という概念は現代漢語の親族を呼称する言葉という簡単な概念ではない。本論の研究対象となる親族呼称語は、一般的に親族を指示する言葉であるが、非親族を指示できる言葉と、近世以前の単音節の親族呼称語から派生した非親族意味を持つ言葉も含める。即ち、本論の研究対象は親族語義を持つ呼称語と親族呼称語から派生する呼称語である。ゆえに、「親族呼称語」と考える。

本稿の研究の範囲は主に明清時代の北方官話の白話小説である。明清時代の白話小説の親族呼称語の全貌を把握するため、特に歴史的な変遷を明らかにするために、明中期の《金瓶梅詞話》と清中期の《紅樓夢》を主な比較対象とする。又、需要があれば、他の小説との対照もする。そのため、以上の三つの小説以外に、《三言》、《二拍》、《聊齋俚曲集》、《儒林外史》、《兒女英雄傳》、《海上花列傳》なども言及される。

以上は本稿のテーマと研究の対象を説明した。これから、本稿は今までの親族呼称語についての研究への発展、即ち自分の独創点を説明する。

白話小説の親族呼称語についての研究も多いが、それらの研究は共通な問題がある。即ち、明清時代に渡る視点から検討をしていない。今までの研究は主に二つの方向がある。一つは、ある小説を対象として、その小説の親族呼称語をまとめて分析する。もう一つは、ある言葉をテーマとして、上古から現代まで比較し、この言葉の語義の変遷を詳しく検討する。しかし、この二つの研究方向は全て、明清時代の親族呼称語の全体を検討していない。語義の発展、使用方式及び言語変種では、自分の特徴を持つ近世の親族呼称語の全体を明らかにしない。ゆえに、明清時代の親族呼称語を全面的に考察するは必要だと思われる。そこで、本稿は近世漢語の親族呼称語の全面的で系統的な研究を通し、近世漢語の親族呼称語の語義、使用方式及び親族呼称語の言語変種の分類を究明して、中国近世語の研究へ僅かな貢献を与える。そのため、本稿は《金瓶梅詞話》《醒世姻縁傳》《紅樓夢》の比較を通して、以下の論点を証明したい。

i 明清時代の親族呼称語の語義の変化は単に減少しているだけでなく、語義の単純化される過程である。以上の三つの小説はこの過程で、それぞれの特徴を持っている。

ii 明清時代の親族呼称語は非親族を指示する時に、三つの使用方式が見える。その上、この三つの方式は時代につれて変化している、現代漢語まで、一つの方式だけが残された。

iii 明清時代の親族呼称語の言語変種が豊富で、言語環境を見れば、五つのグループに

分けられた。

上の問題点を証明するために、本稿は三つの方面から検討した。

まず、明清時代の親族呼称語語義の歴史の変遷について、筆者は明清時代の代表的な北方官話の白話小説の中の親族呼称語の用例を徹底的に整理し、各小説の親族呼称語の語義を比較する。“爺、爹、叔、伯”と“哥、兄、弟”と“舅、公”と“媽、娘、婆”と“姐、姊、妹”と“嫂、姑、姉、姨、妯”と“夫人、太太、奶奶”及び“媳婦、姐夫、娘子、相公”という八つのグループの親族呼称語の比較をした。各グループの語義の変化から見れば、明の《金瓶梅詞話》で、親族呼称語は上古の単音節で多義の呼称語と異なり、複音節の言葉が多く増えるが、依然に呼称語の語義が多義で、非親族意味を持っているだけではなく、親族への指示も一対一ではない。一つの言葉は二つの親族意味を持っている、或いは一つの親族関係が二つの言葉で指示される。これは明の時代の方言の複雑性と近世漢語の語義の発展性を反映する。清代に入って、清初の《醒世姻縁傳》で、親族呼称語の語義は明代の《金瓶梅詞話》と比べると、その変化が激しくない。清の中期の《紅樓夢》に至って、明らかな変化が起こった。《紅樓夢》の中で、各の親族呼称語の語義は前の二つの作品と比較すると、意味の減少が見えるだけでなく、各言葉の意味が分化し、単一化した。これは清代の北京語の主導の地位の確立の表現と現代漢語への転化の兆である。筆者は明清時代で、近世漢語の親族呼称語の語義が減少しているだけではなく、親族呼称語の語義と非親族語義が分かれて、単一語義の言葉となったと考える。即ち、語義が単純化し、より厳密な親族の指示系統が形成していると考ええる。即ち、清の中期まで、一つの呼称語が一つの親族か非親族の関係を指示するという現代漢語と近い系統を段々形成していて、語義が単純化している。

第二、明清時代の親族呼称語が非親族という意味拡張の現象について、筆者は、《金瓶梅詞話》《醒世姻縁傳》《紅樓夢》及び《聊齋俚曲集》、《儒林外史》、《兒女英雄傳》の当該現象の用例を分析した。明清時代の親族呼称語が非親族という意味拡張の現象は使用される時に、「仮親族呼称語」、「親族語汎化」と「社会的な親族」という三つの方式が見える。この三つの方式は会話双方の関係(親疎、地位)、呼称語の使用目的(尊敬を表すか、親密を表すか)と言語が使用される時の語義(言葉の原義とする年齢など)、使用場合などから考察すれば、それぞれの特徴を持っている。具代は以下のようである。

・ 仮親族呼称語

- i 会話双方の関係が使用人と主人しかない。主に家の使用人と主人の間で使われる。
- ii 機能は尊敬だけである。親族呼称語の原義と合わない
- iii 使用場合は一般に家庭である。

・ 社会的な親族呼称語

- i 会話双方の関係が多様で、地位の差も多様で。
- ii 機能が多様である。親族呼称語の原義と合わないこともあり、合うこともある。

iii 家庭でも社会の場面でも使用できる。

・ 親族呼称語の汎化

i 会話双方の関係が多様で、一般に平等である。所属の親しさではない。

ii 機能は主に親密を表す。尊敬も表すことはできるが、言葉の原義からなのである。

iii 使用場合は家庭以外である。

その上、この三つの使用方式は時代につれて変化している。明の《金瓶梅詞話》で、三つの方式も使用されるが、「仮親族呼称語」と「社会的な親族」の限界がそれほどはっきりしていない。清初の《醒世姻縁傳》で、この二つの方式が完全に区別して使用される。又、《金瓶梅詞話》で部分の「仮親族呼称語」の方式が用いられる場合は「社会的な親族」に代替される。清の中期の《紅樓夢》に至って、「仮親族呼称語」の使用が基本的に消失した。現代漢語まで、「親族語汎化」しか使用されていない。即ち、この三つの方式は明清時代で継続的に使用されていない。

第三、親族呼称語は現代漢語でも完全に一対一ではないが、近世でたくさんの言語変種を持っている。そのため、親族呼称語への分類が必要だと考える。本論で、筆者は統一な標準の分類を建てるため、言葉の言語環境を根拠として、近世親族呼称語を五つのグループに分けた。近世漢語の複雑性なので、その分類に合っていない親族呼称語の言語変種は少なくない。ところが、このような統一な標準の分類は明清時代の親族呼称語の特徴をより全面的に描写すると考える。この五つ種類は以下のようなものである。

正式交際用の呼称語: 多くは敬語である。使用者の階層が限定され(多くは男子で、教養がある階層)、場面が形式的である。書面も口頭も用いられる。

専門用の呼称語: 敬語ではないが、特別な場面だけで用いられる。使用者の階層が広い、書面も口頭も用いられる。

一般用の呼称語: 敬語ではなく、多様な場面で用いられる。使用者の階層が広い、書面も口頭も用いられる

普通用の方言の呼称語: 敬語ではない。多様な場面で用いられるが、家庭の場面が多い。使用者の階層が狭くない、口頭に用いられることを主とする

俚語: 私的な場面でしか用いられない。会話双方の関係が限定され、口頭語である。

要するに、明清時代の親族呼称語は明から清初までという段階で、語義、指示対象、使用方式、言語変種などは多様である。清の中期から、現代漢語への転化の兆が強く、語義が単純化し、厳密な指示系統が構築された。これは清の中期から北京語の優位の確立と関係があり、社会発展の結果である。このような発展の過程の中で、清初の《醒世姻縁傳》は明らかな過渡期の特徴を持っている。清の中期の《紅樓夢》はこの過程の転化の結果の一つと言える。